

刊記データベースの提案

橋口 侯之介 (誠心堂書店)

S 刊記とは

和本のうち印刷本である版本の巻末などに記された出版に関する記述を刊記かんきという。

もともと中世以前の写本でも、誰がいつ書写したかを記す「奥書」おくがきが伝統的に存在していた。版本の刊記は、この習慣が根付いていたからだと思われる。江戸時代には、たとえば享保の改革のさいの条文に「何書物ニよらす此以後新板之物、作者并板元之実名、奥書ニ為致可申候事」とあるように、刊記のことを奥書ともいつていた。欧米では扉などのタイトルページに記され、巻末に記すことは少ない。中国でもこの方法は必ずしも習慣的でなく、明代の木記もきや清代の封面(見返し)などを除くとあまり見ることがない。日本では、そのまま巻末に丁を改めて書く「奥付」へとつながり、現代にいたる長い歴史的な積み重ねがある。用語としては、現代の書誌学に応じて「刊記」で統一しておく。

その刊記には、じつに多くの情報が含まれていて、それを見れば版本の出版・販売の経緯をかなり明らかにすることができる。しかし、それを正しく読み取るのは必ずしも簡単ではない。出版に関する江戸時代の

笑矣若夫心正則業正又
易自得於書注外干祿
云乎哉瑤祐丁巳嘉平
郡文學衡陽陳蘭孫書

文化十四年刊

書林

江戸日本橋通一丁目
須原屋茂兵衛
門漢管年刊一丁目
須原屋伊八
大塚心齋橋通
河内屋喜兵衛
京都浅草東馬路
浅倉屋久兵衛梓

制度・慣行が複雑だからである。江戸時代の出版物には、次のような特徴があった。かなり特殊な発展をとげた。

1. 十七世紀に、活字版でなく整版せいばん(木版)による印刷が中心となり、板木の寿命が長いので、百年、二百年単位で印刷された。その板木を売買譲渡することで、別の板元から増刷されることも多くなる。

2. 同一テキストを複数の板元から刊行する事例が多かったが、この重板・類板を締め出すことで京・大坂では元禄の頃、江戸でも十八世紀前半のうちに、事実上の出版権(板株)が確立した。これを本屋仲間が

官板『干祿字書』の刊記。右側が本来の官板としての刊記。年号だけで素気ない。左はその後印本で、板木を払い下げて民間で売られるようになった。左に丁を改めて加えたのが奥付で、4軒の本屋が並んで書かれている。末行の浅倉屋久兵衛が事実上の板元である。

帳簿で管理した。この原簿を対照するために刊記には初刷の時の年代を修正しないでそのまま載せる習慣があった。

3. それが進んで十八世紀後半からは、板株を分割して複数の本屋で共同出版(相合板)する事例が増大し、十九世紀に入るとその割合は六〇%近くに達する(拙著『江戸の本屋と本づくり』)。

4. 私家版(素人蔵板)の刊行も盛んで、つねに二、三〇%を占めた(同書)。この蔵板物を後に本屋が発売することも多かった。

5. 刊行した本を他都市で販売する(売りさばき、売出し)ために、複数の都市を超えた本屋名が刊記に並ぶことが多い。前頁の図の左側のように、四軒の本屋が並んで表記されているが、本当の板元は浅倉屋久兵衛で、あとの三軒は売りさばきだけを担う店である。

このため刊記を見ただけでは、次のような問題点が浮き上がる。

1. その本の実際の発売時期がわからない。初版初刷刊行から、後刷、再板などの経過(刊印修)を経るどの位置に属する本なのかははっきりしないからだ。別の本と比較対照してはじめて認識できる問題である。
2. 刊記をそのまま「図書カード」(コンピュータ入力も含めて)に採録しても、そこに載っているそれぞれの本屋の役割がわからないと正しい情報にならない。

3. 刊記のない本も私家版をはじめとして少なくない。そうした本の刊行状況を知る手立てでも必要である。

§ 刊記を正しく読むために

この問題は、ことと刻本漢籍の刊印修に関しては、長澤規矩也氏の『和刻本漢籍分類目録』(昭和五十一年初版、汲古書院)で解決していた。該博

な先生は全国の文庫の本を実物で比較対照し、その順番まで明らかにして目録を作成された。左の図は同目録の官板『千禄字書』の部分である。最初官板として昌平坂学問所で刊行された大本一冊。そのときの刊記はどの官板もそうであるように、巻末に「文化十四年刊」とあるだけである(前頁図の右側)。

その板木が払い下げられて、はじめは出雲寺万次郎から出された。板木はその後和泉屋金右衛門に渡り、さらに浅倉屋久兵衛へと移った(前頁図の左側がそれ)。最後の浅倉屋が印刷した本は明治に入っても続いた、ということがわかる。

つまり書誌の基本情報は同一でも、刊記に載った本屋名によって、後印、後修、再板などの経過の中でその本が位置づけられるのである。私たちはこれを大いに役立たせていただいている。

同	同	同	同	同	同
同(後印、出雲寺万次郎)	同(後印、江、和泉屋金右衛門)	同(後印、浅倉屋久兵衛)	同(明治印、浅倉屋久兵衛)		
大	大	大	大	大	一

しかしながら、大部分の「国書」にはそれができていない。西鶴・秋成などのメジャーな本はよく研究されているが、大半の本は手がつけられていない。インターネットの「日本古典籍総合目録」は大変有益なデータベースだが、そこまでの用意ができていない。その元になっている各所蔵者が出すデータが不十分だからである。これまであまり「刊印修」などにはこだわってこなかったであろう。

S刊記データベースのイメージ

そこで、すべての版本について、刊記の記載とそこから判断される後印、後修、再板などの「刊印修」経過を明らかにするのが目的の「刊記データベース」が必要である。これはテキストの出版を明確にすることにも使用できる。完全な初版・初印でなくとも、調査のための「基準点」となる本の特定が可能になるだろう。それぞれの本がどのような経過をたどって発刊されてきたのかを明らかにすることは図書館学・書誌学だけでなく、和本を利用する研究者・愛好家にとっても必要だろう。

これには各個別の本の刊記を正しくとって記述しておくことはいうまでもない（下図はそのイメージ画像）。巻末の記述だけでなく、見返し、序跋、刊語などにも必要である。さらにその補完として、これら関係する記述のある頁を画像にしておくことが有効である。文字データと画像データがきちんとつながれている必要がある。この画像とのリンクが今後非常に重要になる。本文も含めた全画像も必要だが、次のような問題からあとまわしになる恐れがあるので、刊記などの情報頁画像だけでも先行したいのである。

現在のインターネット上では、各地の図書館の和本の本文画像がかなり見られるようになったが、いわゆる「貴重書」が優先するので、一般的な和本にはなかなか手が回らない、機関ごとにはばらばらの規格（フォーマット）で撮られ、独自の見せ方をしているため統一性がない。テキストとして版や刷りの違うすべてを画像化や翻刻する必要がある。今まではなかったもので、後印本や再板本の画像はほとんど撮られない、などの問題があるのである。とくに規格の不統一はまるで腫れ物に触るかのようになり誰もそれをまとめようという動きがない。それなら、刊記関係の画像だ

刊記データベース
Quit

〇〇大学〇文庫
AB-1224

基本情報 著作ID: 339902

統一書名 住吉千句 巻数 1巻

統一編者 築花房夜寒編 著者・画家名

形態事項 書型 半紙 数量 1冊

位置情報 刊年 安永5年刊 西暦 1776


刊行状況 後印

出版地 江戸

板元 鶴屋喜右衛門

刊記・奥書の記述 江戸通油町 儀鶴堂 鶴屋喜右衛門

解説 特記事項
原刊記に「安永五年申 書林 西村源六」あり。鶴屋喜右衛門の蔵版目録あり。



画像ファイル名 Z款netオリジナル画像#sansho123年住吉千句二重刊記.tif

参照

けでも先行したい。それを容易に見られることが重要である。つまり広く公開することが絶対条件である。

画像を撮ることは容易になっている。市販のスキヤナーでも十分な解像度があるし、一眼レフ式のデジタルカメラも精度が高い。絵画や錦絵のような精度と照明技術の必要なジャンルはさておき、一般的な楮紙の袋綴和本は、これで十分である。その画像を、圧縮のない**bitmap**形式でサーバー内に保存しておき、インターネットを通して公開するときは、見やすい**gif**ファイルにする、といった現在の標準的な方法で十分である。将来、規格が変化しても**bitmap**があれば変換ができる。

「刊記データベース」の内容は刊記関係に重点を置き、きちんとした書誌データは「日本古典籍データベース」にある固有の番号「著作ID」と関係づけて参照する。画像が複数枚あってもサムネイル（縮小一覽表示）で対応する。

S書誌データベースの基礎となるもの

これからのデータベースに求められるのは、順応性があって、融通の利くフレキシブルな構造であり、相互の連携がとりやすいことである。今使われている図書館用のシステムは洋装本には優れているが、和本となると不十分なところがある。とくに画像と結びつけることが難しい。従来の資産を残すためなら、今ある図書館用のシステムに至急、複数の画像とのリンク用のフィールドをつけてほしい。また刊記データベースのような外部のシステムと連携できるようにしてほしいものである。

データの基礎となるものに、『和刻本漢籍分類目録』をデジタル化したい。国文学研究資料館のインターネット「和刻本漢籍総合データベース」

ス」では主として刊記や跋文などの記述を少しずつ公開している。長澤版の目録とは一線画しているようだが、二重手間にならないようにお願いしたい。さらに画像も入れられるようにすることも必要である。

そのほかの「国書」については、一千万件以上はあると思われる全国の版本を悉皆調査したいくらいだが、現実的でないので主要な文庫・機関から情報を提供してもらおう。『江戸時代初期出版年表』（岡雅彦他、勉誠出版）は刊記を集めたありがたい目録だが、デジタルデータ化されているのだろうか？ 画像は撮ったのだろうか？

龍谷大学・日下幸男教授は『中野本・宣長本刊記集成』などの業績があるが、ぜひデジタル化してデータベースの元になってほしいものである。さまざまな人がアクセスしてデータを集積することが望ましいと思う。

江戸期版本の数は、インターネットの「日本古典籍総合目録」で集計すると、江戸時代の刊年がわかっている分だけで約四万四千点ある（拙著『江戸の本屋と本づくり』）。刊記のない本、中世以前に成立した古典、和刻本漢籍、仏教書を加えると、実数はその倍あるだろう。八万としてみる。『和刻本漢籍分類目録』でサンプル集計したところ一点の本に対して、刊記の異なる後印・再板本の数は三・二七だった。これで単純計算すると二十五万件を超えるが、少なめに見てもおよそ二十万というのが対象となる刊記データベースの総レコード数である。

この仕事を進めるためには、知識を持った人材の育成など多くの課題はある。ただ、これが基礎となつて、次のより大がかりな「日本語の歴史の典籍のデータベース構想」へとつながる可能性があることを理解していただきたいのである。

(二〇一二年一月)